

この講義では、

測度論と積分論を

学習します。

- 。 測度論 (measure theory) とは何か。 測度 (measure) とは、
 モノサシ, はかり のこと。 長さ, 面積, 体積 ... を はかる こと,
 実際には そう 簡単 な こと じゃ ない。

例 海岸線の長さを測ることを考える。たとえば, 波のない静かな日に,
 直径 1 km という円形の島の周囲の長さを測ることにする。もし縮尺
 $1/50000$ または $1/25000$ の地図上で周囲の長さを測るならば 周囲は
 約 3.14 km という値が得られる。しかし海岸線の小さな出入 (小湾や
 小半島) まで考えるなら, '長さ' の値はもう少し大きくなるにちがいない。
 $1/10000$, $1/5000$ と大縮尺になるにしたがって, '長さ' は増えて
 ゆくと考えられる。さらに一つ一つの岩石の細かな凹凸まで考慮する
 なら測られた '長さ' はもっと大きな値をとると予想できる。

海岸線の長さの測り方にはどんな方法があるか。

(方法 A) $\varepsilon > 0$ を与える。"イバ"と長さを ε に近づけて,
 海岸線にそって歩く。歩数に ε をかければ, 海岸線のおよその
 長さ $L_A(\varepsilon)$ を得る。 $\varepsilon \downarrow 0$ とするとき, $L_A(\varepsilon)$ は 真の長さ (存在
 するとして) に収束することが期待される。しかし, $\varepsilon \downarrow 0$ のとき,
 無視していた小さな出入りが次々と現れるから $L_A(\varepsilon) \uparrow$ であり,
 $L_A(\varepsilon) \uparrow +\infty$ as $\varepsilon \downarrow 0$ となるかもしれない。

(方法 B) $\varepsilon > 0$ を与える。海岸線からの距離が ε 以内の領域
 (海岸線の ε -近傍) を, A の方法で最短距離になるように
 歩く。"イバ"のほかに $\varepsilon' > 0$ としたときの, この値を $L_B(\varepsilon, \varepsilon')$
 で表す。かりに $\lim_{\varepsilon' \downarrow 0} L_B(\varepsilon, \varepsilon') \equiv L_B(\varepsilon)$ が存在したとすると。
 (しかし, $\varepsilon \downarrow 0$ のとき $L_B(\varepsilon) \uparrow +\infty$ となるかもしれない。)

Klein 曲線 $(m+1) = (\frac{2}{3} + \frac{1}{3})a_n = \frac{2}{3}a_n$

(方法C) $\epsilon > 0$ を与える。海岸線の ϵ -近傍は、 $|\alpha| > 2\epsilon$ の

γ - ϵ -近傍の形状をしていれることができる。 $\alpha \gamma - \epsilon - 2\epsilon$ の '面積' は

1/4 πr^2 であり、 $\epsilon > 0$ を与える。海岸線 γ , ϵ 上の点を中心とした

半径 ϵ の小円 γ を与え、 ϵ の数が最小になるようにする。

この値 $N = N(\epsilon)$ を与え、 $L_0(\epsilon) = \pi \epsilon^2 \cdot N(\epsilon)$ とおく。

$L_0(\epsilon)$ は $\epsilon \rightarrow 0$ のとき $L_0(\epsilon) \rightarrow L_0$ となる。

1/4 πr^2 (L. F. Richardson) という人は、方法Aで

$L_0(\epsilon)$ と ϵ の関係に次の単純な関係が成り立つことがわかった。

命題 (Richardson) 与えられた海岸線に対して $F, D > 0$ を選べば、

$$L_0(\epsilon) \sim F \epsilon^{1-D}$$

と成る。(与えられた海岸線の奇数は $F \epsilon^{-D}$ と成る。)

これは Richardson 効果と成る。

注. D の値は国によって異なる。例、英国西海岸 $D = \frac{2}{3}$, 南アフリカ $D = 1$, 木村カスリ $D = \frac{1}{2}$

$\epsilon < \epsilon_0$ ならば $L_0(\epsilon) = F \epsilon^{-D}$ ならば、 $\epsilon \rightarrow 0$ のとき $L_0(\epsilon) \rightarrow +\infty$ となる。

$\epsilon > D$ ならば $L_0(\epsilon) = F \epsilon^{-D} \cdot \epsilon^\alpha = F \epsilon^{\alpha-D} \rightarrow 0, \epsilon \rightarrow 0$ となる。

と成るが、この以外 α の値は $L_0(\epsilon)$ に対して成り立つ。

このことは $L_0(\epsilon)$ の定義 (この $L_0(\epsilon)$ の定義を参照) である。

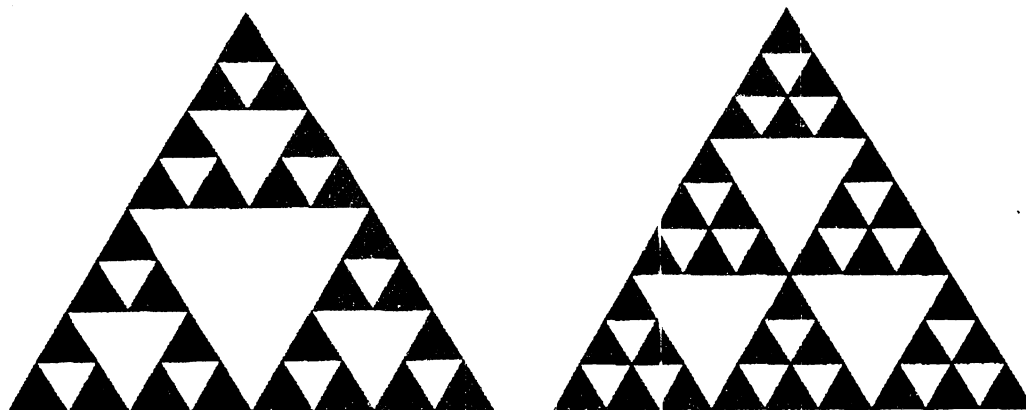


FIG. 1. – The first stages in the construction of SG(2) and SG(3).

Unless the sequence ξ is periodic $F^{(\xi)}$ does not have any exact scaling property, but it is spatially homogeneous in the sense that all triangles of a given size in $F^{(\xi)}$ are identical. Figure 2 shows the first 3 levels in the construction of the set F associated with the sequence $\xi = (2, 3, 2, \dots)$.

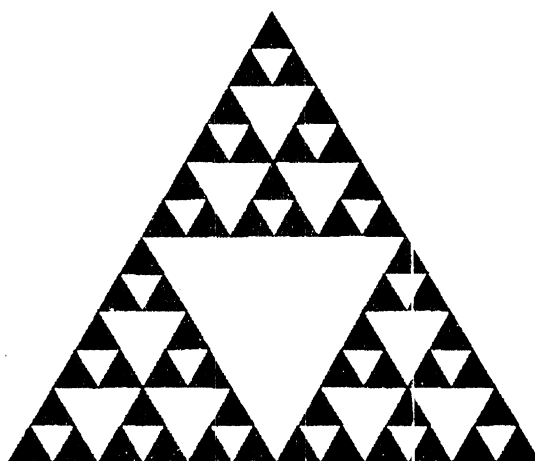


FIG. 2. – The first three levels of a scale irregular Sierpinski gasket.

A previous paper by one of us [10] considered the case when the environment sequence ξ was a sequence of i.i.d. random variables; the sets obtained were called ‘homogeneous random Sierpinski gaskets’. We use a different term here, as the sets studied in this paper are not necessarily random. An example of such a scale irregular Sierpinski gasket was discussed in Section 9 of [10]. We also remark that if, at each level, one chooses a different (random) procedure for subdividing each small triangle, then one obtains an example of the random recursive fractals studied in [19], and that diffusions on some sets of this type are studied in [11].

The p few addi "subdivi spondin sentially which is neously again cc su, geste If you ample ir same tr pentago simply (mann hi formal h D). The i conform this tilir in C or in the patt packing tions, sc

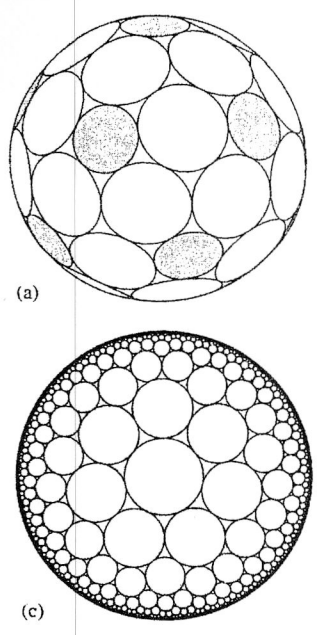
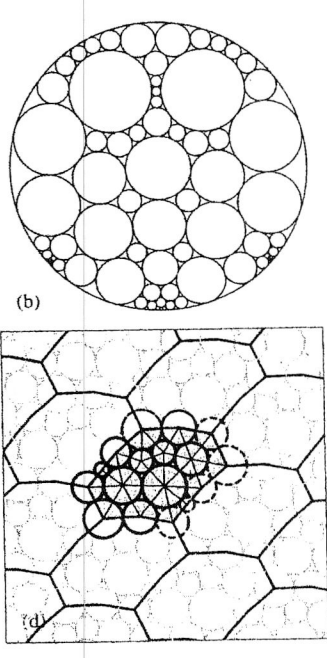


Figure 3. Maximal circle packing.

Now, expected, it is a ro packings like those of figure 3. You might be to improve conformal fidelity via refinement, as we did in the box on page 1382. The key experim... diffe haps more tern. unde greg are t gatic com prec D in Po lines: The fron is p corr up v is re Mot Parr obsa verq asso fan. fun



or after a that the a corre- ct, an es- tiling T simulta- result is this T is angle ex- it try the uclidean yields a re S. Rie- e is a cone of C or so-called s of T. Is does it lie les? Does ore circle uch ques-

have sus- packing; "se" circle instinc- might be to improve conformal fidelity via refinement, as we did in the box on page 1382. The key experim... diffe haps more tern. unde greg are t gatic com prec

work out- e 11. ame iling the line tage text. oyd, hese con- o be l'en- onal ates

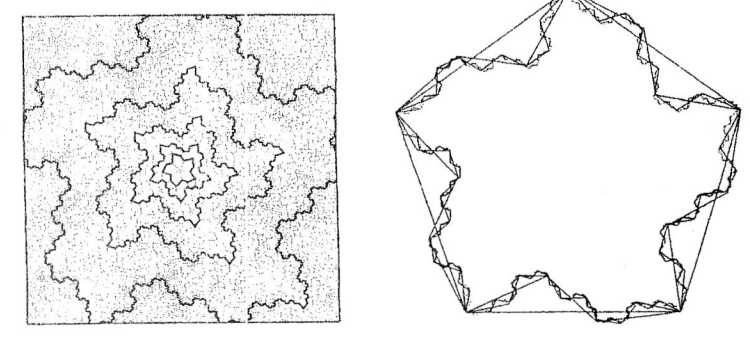


Figure 11. Outline, scale, rotate, and overlay the aggregates.

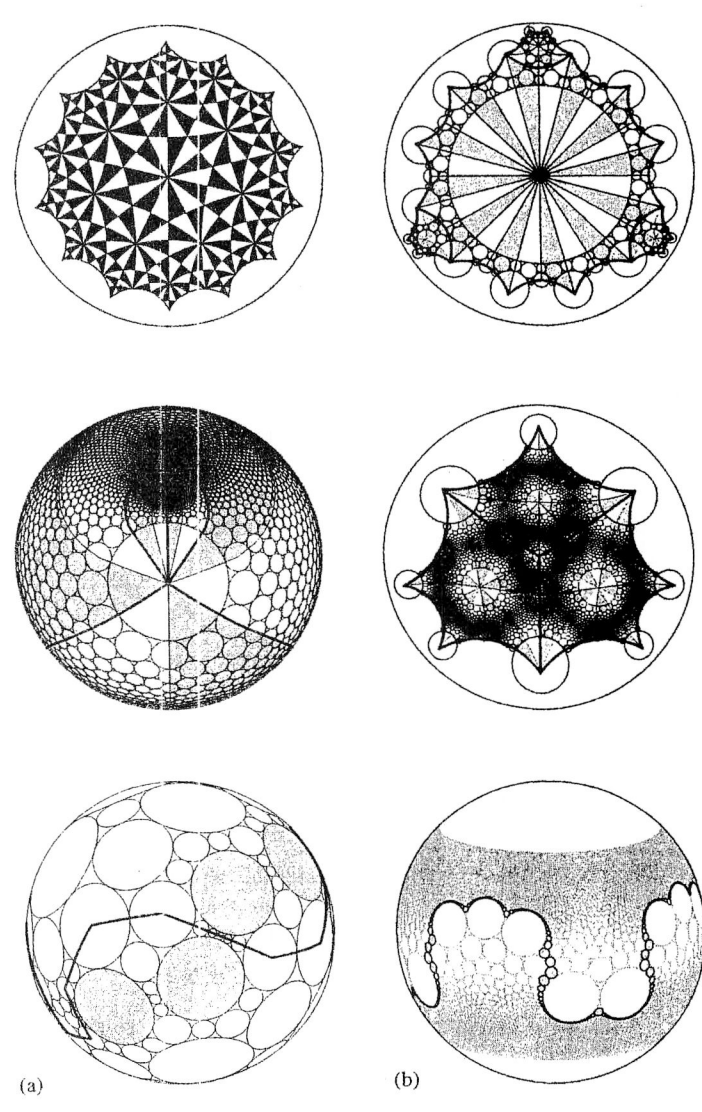


Figure 12. Circle packing for conformal structure.

the cell decomposition of \mathbb{C} defined by $k^{-1}([0, 1])$. And with the scaling confirmed, renormalization (as started on the right in Figure 11) suggests a limit tiling in the pattern of T which would have perfect scaling, fractal pentagonal tiles, and a

実解析演習

191

復習

11) \subset の \sup と \inf を \mathbb{R} に与えられた $\langle \mathbb{R}, \sup, \inf \rangle$ の \mathbb{R} 上
 集合 E 上の \sup と \inf は \mathbb{R} 上の \sup と \inf と一致する。また、
 $\sup E$ が E の要素 (元) であるか、あるいは E の
 境界点であるかを判定する。要素 a が集合 A
 の境界点であるか、あるいは $a \in A$ であるかを判定する。
 \mathbb{R} 上の \sup と \inf は \mathbb{R} 上の \sup と \inf と一致する。

2つの集合 A, B に対し、 $A \subset B$ ならば

$\sup A$ は $\sup B$ の下にあり、 $\inf A$ は $\inf B$ の上にあり、

$\sup A = \sup B$ である。また、 $A \subset B$ かつ $B \subset A$ ならば、 $A = B$

である。また、 A と B は相違ない。以上。

\mathbb{R} 上の実数全体は集合である。通常 \mathbb{R} である。
 実数には順序がある。つまり、 $a, b \in \mathbb{R}$ に対し、
 $a < b$, $a = b$, $b < a$ のうちのどれか1つが成り立つ。
 $E \subset \mathbb{R}$ である。また、

\mathbb{R} 上の $a \in E$ に対し、 $a \leq b$ である

ならば、 $b \in \mathbb{R}$ である。

$\langle E \text{ は } \mathbb{R} \text{ 上有界} \rangle$ である。つまり、 $b \in E$ かつ $a \in \mathbb{R}$ である。

$B \in E$ かつ $a \in \mathbb{R}$ かつ $a < b$ ならば、 $a \in E$ である。

また、 $a \in B$ かつ $a \leq b$ である

ならば $a \in B$ である。つまり、 $a \in E$ である。

以上、 $\sup E$ である。つまり、 $\sup E = \sup E$ である。

E の下界 $\inf E$ (または $\inf E$) には、
 $\inf E = -\sup(-E)$ である。つまり、

$\inf E = -\sup(-E)$ である。

以下 A, B, C 等は集合を表す。

1 つまに証明せよ

- (a) $(A \cup B) \cap C = (A \cap C) \cup (B \cap C)$
- (b) $(A \cap B) \cup C = (A \cup C) \cap (B \cup C)$
- (c) $A \setminus B = (A \cup B) \setminus B = A \setminus (A \cap B)$
- (d) $A \setminus B = \emptyset \iff A \subset B$
- (e) $(A \cap B) \setminus C = (A \setminus C) \cap (B \setminus C)$
- (f) $A \cap (B \setminus C) = (A \cap B) \setminus (A \cap C)$
- (g) $(A \setminus (E \setminus F)) \cap F = A \cap (E^c \cup F) \cap F = A \cap F$
- (h) $(A \setminus (E \setminus F)) \setminus F = A \cap E^c \cap F^c = (A \cap F^c) \setminus E$

2. $f: A \rightarrow B$ の写像, $P, P_1, P_2 \subset A, Q, Q_1, Q_2 \subset B$ とする。つまに証明せよ。

- (a) $P_1 \subset P_2 \implies f(P_1) \subset f(P_2)$
- (b) $f(P_1 \cup P_2) = f(P_1) \cup f(P_2)$
- (c) $f(P_1 \cap P_2) \subset f(P_1) \cap f(P_2)$
- (d) $f(A \setminus P) \supset f(A) \setminus f(P)$
- (e) $Q_1 \subset Q_2 \implies f^{-1}(Q_1) \subset f^{-1}(Q_2)$

3 (a) P を命題「雪は黒い」とする。 P の否定命題 $\neg P$ とし、命題 $P \vee \neg P$ はつねに真であること、命題 $P \wedge \neg P$ はつねに偽であることを示せ。

- (b) $P(x)$ を述語「 x は黒い」とし、
 $A = \{x \in U; P(x) \text{ が真}\}$ とし集合 A を定める。
 - 述語 $\neg P(x)$ ($P(x)$ でない) の内容を $\neg P(x)$ とし、
 - $A^c = \{x \in U; \neg P(x) \text{ が真}\}$ とし集合 A^c を定める。
 - $A \cup A^c = U, A \cap A^c = \emptyset$ とし示せ。

実解析

192

σ -algebra

X は σ -代数 \mathcal{A} 上の σ -可測関数 f であり、 X の部分集合 A に対して $f^{-1}(A) \in \mathcal{A}$ である。

\mathcal{A} 上の有限 σ -代数 \mathcal{A}' である。

(1) $X \in \mathcal{A}'$

(2) $A \in \mathcal{A}'$ ならば $A^c \in \mathcal{A}'$

(3) $A \in \mathcal{A}'$ かつ $B \in \mathcal{A}'$ ならば $A \cup B \in \mathcal{A}'$

\mathcal{A}' は σ -代数である。

\mathcal{A} 上の σ -代数 \mathcal{A}' (σ -algebra) である。

(1) $X \in \mathcal{A}'$

(2) $A \in \mathcal{A}'$ ならば $A^c \in \mathcal{A}'$

(3) $A_n \in \mathcal{A}'$, $n=1, 2, \dots$, ならば $(\bigcup_{n \in \mathbb{N}} A_n) \in \mathcal{A}'$

\mathcal{A}' は σ -代数である。

C は X の部分集合の σ -代数である。 C は σ -可測関数 f の σ -代数である。 C は σ -代数である。

$\sigma(C)$ である。

$X \in \mathcal{A}$ ならば $X = \mathbb{R}^d$ である。 \mathbb{R}^d の σ -代数 \mathcal{A} (可測関数) 全体 $C(\mathbb{R}^d)$ である。 $C(\mathbb{R}^d)$ は σ -代数である。 $\mathcal{B}(\mathbb{R}^d)$ である。

1. $A \subset X$ 閉区間 $I_A(x)$ 上,

$$I_A(x) = 1, x \in A$$

$$= 0, x \notin A$$

定義: I_A 可測.

(a) $I_{A^c}(x) = 1 - I_A(x)$ 可測:

$$I_{A \cup B}(x) = I_A(x) + I_B(x) - I_{A \cap B}(x)$$

(b) $I_A(x)$ 可測: $I_A(x)$ 可測, $I_{A^c}(x)$ 可測, $I_{A \cap B}(x)$ 可測.

可測: $I_A(x)$ 可測:

$$I_A(x) = \inf_{\lambda \in \Lambda} I_{A_\lambda}(x), x \in X$$

$$I_{A^c}(x) = \sup_{\lambda \in \Lambda} I_{A_\lambda}(x), x \in X$$

2. $X = \{x_1, x_2, \dots\}$ の有限加法族 \mathcal{A} 可測列を列挙せよ.

3. $A \in \mathcal{A}$ の σ -加法族 \mathcal{A} 可測. 次 $I_A(x)$ 可測:
 $A_n \in \mathcal{A}, n=1, 2, \dots, \dots, \bigcap_{n \in \mathbb{N}} A_n \in \mathcal{A}$

真解析

193

G-加法族の例

1 (i) 有限回の硬貨投げ

硬貨の表を1, 裏を0と表す。n回の硬貨投げの結果
 の可能性全体 $\{0, 1\}^n \in X$ と可。 $\emptyset \in X$ の部分集合
 全体と可。 $\mathcal{A} = \{A : A \subset X\}$ 。 \emptyset は G-加法族と可。

(ii) 有限回の乱数

2次元格子 \mathbb{Z}^2 の原点から出発する長 1 の直線の集合

$\in X$ と可。:

$$X = \{x = (x_1, x_2); \vec{x}_i = (x_0^{(i)}, x_1^{(i)}, \dots, x_n^{(i)}), i=1, 2, \\ x_0^{(1)} = x_0^{(2)} = 0, \|(x_k^{(1)}, x_k^{(2)}) - (x_{k+1}^{(1)}, x_{k+1}^{(2)})\| = 1, \\ k=1, 2, \dots, n\}$$

$\emptyset \in X$ の部分集合全体と可。 \emptyset は G-加法族と可。

(iii) k-1 の配置

1 から n までの数字を書いた m 枚のカード, 1 から n までの

番号のついた場所を σ とし $\sigma \in \Omega$ 。この配置の可能性全体

X は, n 個の置換全体 Δ_n と可:

$$X = \Delta_n = \{\sigma : \{1, \dots, n\} \rightarrow \{1, \dots, n\}; \sigma(i) \neq \sigma(j), (i, j) \in \Omega\}$$

$\emptyset \in \Delta_n$ の部分集合全体と可。 \emptyset は G-加法族と可。

2 (i) 無限回の硬貨投げ

$$X = \{0, 1\}^{\mathbb{N}} = \{x = (x_1, x_2, \dots); x_i = 1 \text{ or } 0\}$$

と可。 $\emptyset \in X$ の部分集合全体と可。 \emptyset は

G-加法族と可。

1. 左ページの 1 (i) - (iii), 2 (i) の主張をしめせ。

Lebesgue 小伝

数学者 Lebesgue については、L. Perrin が「数学思想の大きな流れ」(1948) に「近代解析の革新者アンリ・ルベグ」を載せている。

Henri Léon Lebesgue (1875, 6/23—1941, 7/26) はフランスの Bauvais に生れた。幼少の頃に父と死別し、生活は豊かではなかった。中学の途中で Paris に移り、1894年に Ecole Normale Supérieure に



Henri Lebesgue

入学した。1897年授教資格者となり、Nancy の中学校の教師に就職し、多忙の中で研究を進めた。

C. R. Acad. Sci. Paris の 1898年 6月19日号と11月27日号、1900年11月26日号と12月3日号、1901年4月29日号に順次発表された成果をまとめたものが、1902年学位論文として現れた：Intégrale, Longueur, Aire. Thèse, Paris (1902); Annali di Matematica Pura e Appl. (3) 7 (1902), 231—359.

「積分、長さ、面積」と題するこの論文が、画期的な Lebesgue 積分の誕生を告げたのである。すなわち、Cantor, M. E. C. Jordan (1838—1921), É. F. E. J. Borel (1871—1956) の業績に基礎をおいて、測度と積分の概念を導入し、その理論を展開したものである。その目次は：序文；I. 集合の測度；II. 積分；III. 曲線の長さ；IV. 曲面積；V. 平面上に賦布可能な曲面；VI. Plateau 問題。

同年 Rennes の理科大学講師となり、ここで Borel 著作に含まれる二つの著作が刊行された：

Leçons sur l'intégration et la recherche des fonctions primitives. Paris (1901)；

Leçons sur les séries trigonométriques. Paris (1906).

前者は 1928年に再版されている。

ついで、1906年 Poitiers の大学の講師となり、1910年 Sorbonne 大学の講師に就任した。1920年 Sorbonne 大学の教授となったが、1921年には Paris の Collège de France の教授に転じた。1922年に Jordan の後任として Paris の科学アカデミーの会員に推荐された。そして、ロンドンの王立協会、ローマのリッツェイ学士院、デンマークの王立学士院、ベルギー・マルメニアアボランダの学士院などの会員としても迎

えられ、多くの大学から名誉学位を贈られた。生涯を通じて簡素に暮し、四か月余りの病臥の後、世を去った。

可測関数

集合 X と σ -代数 \mathcal{A} の組 (X, \mathcal{A}) 上

<<可測空間>> としよ。

$f \in X$ 上の X' への関数, (X, \mathcal{A}) 上可測

空間と可測。 f が可測関数とあるとき,

$$\{f^{-1}(A') : A' \in \mathcal{A}'\} \subset \mathcal{A}$$

とあるとき、 $(\mathcal{A}, \mathcal{A}')$ は " \mathcal{A} -可測" とある。

例 (無限回の確率投り)

$$(X, \mathcal{A}) = (\{1, 2, \dots, 6\}^{\mathbb{N}}, \mathcal{P}(X)), \mathcal{P}(X) \equiv X \text{ の部分集合全体}$$

$$(X', \mathcal{A}') = (\mathbb{N} \cup \{+\infty\}, \mathcal{P}(X'))$$

$$f : X \rightarrow X', (x_1, x_2, x_3, \dots) \mapsto \begin{cases} \min\{n \geq 1 : x_n = 6\} & \text{if } \exists n \neq \emptyset \\ +\infty & \text{otherwise} \end{cases}$$

任意の $A' \in \mathcal{P}(X')$ に対し,

$$f^{-1}(A') = \bigcup_{i \in A'} \{(x_1, x_2, x_3, \dots) : x_i = 6\}$$

$$\in \mathcal{P}(X)$$

とあるから、 f は可測関数とある。

$f_n, n=1, 2, \dots, \infty$ 上の X' への関数列 $\{f_n\}$ があり、

$$f_n(x) \rightarrow f_0(x) \text{ とある。}$$

Th.1. (f_n) が可測関数列ならば、 f_0 も可測関数とある。

$f, g : X \rightarrow X'$ が可測関数とある。

Th.2. (1) $a, b \in \mathbb{R}$ (または \mathbb{C}) に対し $af + bg$ は可測関数とある。
(2) f/g は可測関数、 $g \neq 0$ ならば f/g は可測関数とある。

1. $(X, \mathcal{A}), (X, \mathcal{A}')$ は可測空間, $f \in X$ から X' への関数と可測。
 X の集合族 $\{f^{-1}(A); A \in \mathcal{A}'\}$ は σ -加法族と可測性。

2. $X = X' = \mathbb{R}, \mathcal{A} = \mathcal{A}' = \mathcal{B}(\mathbb{R})$ と可測。 \rightarrow "の逆は
 同様に可測性。

- (i) $\forall a \in \mathbb{R} (\{x; f(x) > a\} \in \mathcal{B}(\mathbb{R}))$
- (ii) $\forall a \in \mathbb{R} (\{x; f(x) \geq a\} \in \mathcal{B}(\mathbb{R}))$
- (iii) $\forall a \in \mathbb{R} (\{x; f(x) < a\} \in \mathcal{B}(\mathbb{R}))$
- (iv) $\forall a \in \mathbb{R} (\{x; f(x) \leq a\} \in \mathcal{B}(\mathbb{R}))$

3. $(A_i), i=1, 2, \dots$ は \mathbb{R} 上の ~~ボレル~~ ボレル集合 (i.e. $A_i \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$)
 $(a_i), i=1, 2, \dots$ は実数列, $a_i \neq a_j$ for $i \neq j$
 と可測。 $a \in \mathbb{R}$, 実関数

$$f(x) = \sum_{i=1}^{\infty} a_i \chi_{A_i}(x)$$

は可測関数 $(\mathcal{A}(\mathbb{R}), \mathcal{B}(\mathbb{R})), (\mathbb{R}, \mathcal{B}(\mathbb{R}))$ 間の
 可測性。

実解析

195

外測度からなる測度

集合 X の可測部分集合 A に対して実数 $\mu^*(A)$ が定義され、次の4条件を満たすとき、集合関数 μ^* は X 上の外測度と

(1) $0 \leq \mu^*(A) \leq +\infty$

(2) $\mu^*(\emptyset) = 0$

(3) $A \subset B \Rightarrow \mu^*(A) \leq \mu^*(B)$

(4) $\mu^*\left(\bigcup_{n=1}^{\infty} A_n\right) \leq \sum_{n=1}^{\infty} \mu^*(A_n)$

条件 (4) は測度の条件 (ii) (195) よりもゆるく、成り立ちやすい

例. \mathbb{R}^n の部分集合 A に対して、 A は高次元可算個の有界な

互不相同な区間 I_i の列 $\{I_i; i=1, 2, \dots\}$ で被覆して $A \subset \bigcup_{i=1}^{\infty} I_i$ と

してるとき、値 $\sum_{i=1}^{\infty} |I_i|$ の \inf が被覆の最小値に好む下界

$$\mu^*(A) = \inf \left\{ \sum_{i=1}^{\infty} |I_i|; A \subset \bigcup_{i=1}^{\infty} I_i \right\}$$

この μ^* は μ^* であり、上の (1) - (4) を満足する。 μ^* は \mathbb{R}^n 上の外測度と一致する。

外測度 μ^* に関して A が可測であるとき、

(*)

$$\mu^*(W \cap X) + \mu^*(W \cap X^c) = \mu^*(W) = \mu^*(W \cap A) + \mu^*(W \cap A^c)$$

と表すことができる。

これはつまり、 W の外測度からその分割の最小値に一致

することを意味する。 μ^* は \mathbb{R}^n 上の外測度と一致する

$A \dots$ 花子から花見に行くという事象

$W \dots$ 太郎から花見に行くという事象

と σ -代数、可測性の要請する(家観性)から理解できるように

と表す。 μ^* は \mathbb{R}^n 上の外測度と一致する

条件 (*) を満たすとき、 A は \mathbb{R}^n 上の可測と一致する。

μ^* が σ 測度 μ に σ -可測な集合 \mathcal{A} 全体に μ^* を制限した $\mu|_{\mathcal{A}}$ は、 \mathcal{A} の μ^* 測度である。

Th (Carathéodory の定理) μ は σ -可測な集合 \mathcal{A} 全体に μ^* を制限した $\mu|_{\mathcal{A}}$ は、 \mathcal{A} の μ^* 測度である。

μ^* が σ 測度 μ に σ -可測な集合 \mathcal{A} 全体に μ^* を制限した $\mu|_{\mathcal{A}}$ は、 \mathcal{A} の μ^* 測度である。

実解析

1の6

拡張定理

$X =$ ある集合, $\mathcal{A} = X$ の有限加法族, $\mathcal{B} = X$ の σ -加法族とする。関数 $m: \mathcal{A} \rightarrow \bar{\mathbb{R}}^+$ が $(\mathcal{A} \ni$ 含むもの)

有限加法的測度とは,

(i) $m(\phi) = 0$

(ii) $A, B \in \mathcal{A}, A \cap B = \phi$ ならば $m(A \cup B) = m(A) + m(B)$

が成り立つことである。

(X, \mathcal{B}) 上の測度 μ が与えられているとする。 μ が m の拡張であるとは,

全ての $A \in \mathcal{A}$ に対し $\mu(A) = m(A)$

が成り立つことである。

このような μ を定義できることを、 m は \mathcal{B} の上に拡張されるという。

Th. (E. Hopf) (X, \mathcal{A}) 上の有限加法的測度 m が、 (X, \mathcal{B}) 上の測度 μ に拡張されるための必要十分条件は、 m が \mathcal{A} 上完全加法的なこと (i.e. \mathcal{A} の集合に対して 1の5の測度の条件 (i), (ii) をみたすこと) である。

さらに、 m が \mathcal{A} の上で σ -有限である (i.e. 1の5の条件 (*) をみたす) ならば、拡張は一意的である。

問題 2 の つぎに。

$(\mathbb{Z}^2)^\wedge$ 上の測度 m_\wedge は,

$m_\wedge(\{x = (x_{n_1}, x_{n_2}, x_{n_3}, \dots, x_{n_k}); x_{n_1} = x_1, x_{n_2} = x_2, \dots, x_{n_k} = x_k\})$

$= P_{0, x_1}(n_1) P_{x_1, x_2}(n_2 - n_1) \dots P_{x_{k-1}, x_k}(n_k - n_{k-1})$

(ただし、 $P_{x, y}(n)$ は行列 $(P_{x, y}; x, y \in \mathbb{Z}^2)$ の n 乗積の成分、
 $P_{x, y} = \frac{1}{4}$ if $\|x - y\| = 1, P_{x, y} = 0$ if $\|x - y\| \neq 1.$)

として定義する。 (X, \mathcal{A}) 上の測度 m は,

$m(A) = m_\wedge(A)$ if $A \subset (\mathbb{Z}^2)^\wedge$

1. 2つの赤球を1個、白球を1個おとし、1個おとし、全部で \$N\$ 個おとし、おとしに可なり。

(a) 取り出した後再びおとしに可なり (復元抽出)

赤球を \$r\$ 個、白球を \$w\$ 個、おとしに可なり。

可測空間は \$(X, \mathcal{A}) = (\{1, \dots, N\}, \mathcal{P}(X))\$ と可なり。

\$\omega = (\omega_1, \omega_2, \dots, \omega_N) \in X\$ に可なり、\$M(\omega) \ge 0\$ なる

測度に可なり、\$M(A) = \sum M(\omega_j)\$ なる \$(X, \mathcal{A})\$ 上の

\$\omega \in A\$

測度に可なり。

(b) 取り出した後再びおとしに可なり (非復元抽出)

\$N \le m+n\$ の場合のみ可なり。可測空間は

\$(X, \mathcal{A}) = (\{1, \dots, N\}, \mathcal{P}(X))\$; \$N_+(x) \le m, N_-(x) \le n\$

\$\mathcal{P}(X)\$

と可なり。\$N_+(x) = \#\{i : x_i = 1\}\$; \$N_-(x) = \#\{i : x_i = -1\}\$

\$\omega \in X\$ に可なり、\$M(\omega) \ge 0\$ なる測度に可なり、

\$M(A) = \sum M(\omega_j)\$ なる \$(X, \mathcal{A})\$ 上の測度に可なり

\$\omega \in A\$

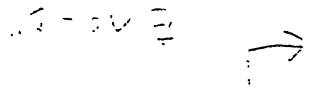
2. \$N_0 \equiv N \cup \{0\}\$ と可なり。\$1, 0, 3, -1, \dots\$ の無限回版を可なり。

\$X = \{x \in (\mathbb{Z}^2)^{N_0} ; x = (x_0, x_1, x_2, \dots), x_k = (x_k^{(1)}, x_k^{(2)})\}\$

\$x_0^{(1)} = x_0^{(2)} = 0, \| (x_k^{(1)}, x_k^{(2)}) - (x_{k-1}^{(1)}, x_{k-1}^{(2)}) \| = 1, k \ge 1\$

\$\mathcal{A} = X\$ の有限試行の可測部分族、\$\mathcal{P}(X) = \mathcal{P}(X)\$ と可なり。

\$N_0\$ の有限集合 \$A = \{n_1, n_2, \dots, n_k\}\$ (\$0 \le n_1 \le n_2 \le \dots \le n_k\$) に可なり、



実解析

1.7

測度

$\mathbb{R}^+ = \{x \in \mathbb{R} : x \geq 0\} \cup \{+\infty\}$ とする。 (X, \mathcal{A}) を可測空間とすると、関数 (写像) $\mu : \mathcal{A} \rightarrow \mathbb{R}^+$ が測度とすると、

(i) $\mu(\emptyset) = 0$

(ii) I は有限または可算集合, E の集合族 $\{A_i\}_{i \in I}$ disjoint set (i.e. $A_i \cap A_j = \emptyset$ for $i \neq j$) とする。

$$\mu\left(\bigcup_{i \in I} A_i\right) = \sum_{i \in I} \mu(A_i)$$

が成り立つとするとする。

(iii) 同様に、特に、

$$\mu(A_1 \cup A_2) = \mu(A_1) + \mu(A_2) \text{ if } A_1 \cap A_2 = \emptyset$$

とすると

測度 μ , $\mu_n (n)$ を持つとき、 σ -有限測度とすると

(*)

集合族 $\mathcal{A}_n \in \mathcal{A}, n=1, 2, \dots, \infty$

$$X = \bigcup_{n=1}^{\infty} A_n \text{ and } \mu(A_n) < +\infty$$

が成り立つ。

可測空間 (X, \mathcal{A}) 上に測度 μ を与え、 σ -有限測度 μ_n を与え、 μ と μ_n の組 (X, \mathcal{A}, μ) を測度空間とすると

(X, \mathcal{A}, μ) を測度空間とすると、次の条件を満たす $Z \subset X$ の集合 (negligible set) とする:

ある $A \in \mathcal{A}$ があって、 $\mu(A) = 0$ かつ $A \supset Z$.

1 $(X, A) = (\{0, 1, 2, \dots, n\}, \mathcal{P}(\{0, 1, 2, \dots, n\}))$ とする。次のように μ は測度 τ と $\tau \in \mathcal{L}(X, \mathcal{A})$ 。 $p \in [0, 1]$ は定数とする。
 $\mu(\{k\}) = \binom{n}{k} p^k (1-p)^{n-k}$, $k = 0, 1, \dots, n$
 $\mu(A) = \sum_{k \in A} \mu(\{k\})$, $A \in \mathcal{A}$

2. $(X, A) = (\{0, 1, 2, \dots\}, \mathcal{P}(\{0, 1, 2, \dots\}))$, $\lambda \in [0, \infty)$ とする。次のように μ は測度 τ と $\tau \in \mathcal{L}(X, \mathcal{A})$ 。
 $\mu(\{k\}) = e^{-\lambda} \frac{\lambda^k}{k!}$, $k = 0, 1, 2, \dots$
 $\mu(A) = \sum_{k \in A} \mu(\{k\})$, $A \in \mathcal{A}$

3. (X, \mathcal{A}, μ) は測度空間とする。 $A_i \in \mathcal{A}$, $i=1, \dots, n$,
 独立

$$\mu\left(\bigcup_{i=1}^n A_i\right) = \sum_{i=1}^n \mu(A_i) - \sum_{i < j} \mu(A_i \cap A_j) + \dots$$

$$+ \sum_{i < j < k} \mu(A_i \cap A_j \cap A_k) + \dots$$

$$+ (-1)^{n+1} \mu(A_1 \cap A_2 \cap \dots \cap A_n)$$

$\tau \in \mathcal{L}(X, \mathcal{A})$ 。 (n 成分の) 乗法 τ と $\tau(A) = \mu(A \cap B) = \mu(A) + \mu(B) - \mu(A \cap B)$.)

具解析

198

確率空間

測度 μ 加えられ、 $\mu(X) = 1$ となるとき、確率測度
 といふ。この場合、測度空間 (X, \mathcal{B}, μ) は確率空間と
 言われる。 σ -加法族 \mathcal{A} 元 $A \in \mathcal{B}$ は事象とよばれる。

例 (a) $X = \{1, 2, 3, 4, 5, 6\}$, $\mathcal{B} = \mathcal{P}(X)$,
 $\mu(A) = \frac{|A|}{6}$, $A \subset X$ ($|A|$ は A の要素の数)

(b) $X = \{(i, j) : i, j = 1, \dots, 6\} = \{1, \dots, 6\}^2$
 $\mathcal{B} = \mathcal{P}(X)$, $\mu(A) = \frac{|A|}{36}$, $A \subset X$

可測関数 $f: X \rightarrow X'$ は確率変数とよばれる。

例 $X' = \{\text{奇}, \text{偶}\}$, $X = \{1, 2, \dots, 6\}$

$f: X \rightarrow X'$, $f(1) = f(2) = f(3) = \text{奇}$, $f(4) = f(5) = f(6) = \text{偶}$

次に X' 上の確率測度 μ' を導入する

例 (a) $\mu'(\{\text{奇}\}) = \mu(\{(i, j) : f(i, j) = \text{奇}\}) = \mu(\{(1, 1), (1, 2), (1, 3), (1, 4), (1, 5), (1, 6)\}) = \frac{2}{6}$
 (b) $\mu'(\{\text{偶}\}) = \mu(\{(i, j) : f(i, j) = \text{偶}\}) = \mu(\{(2, 1), (2, 2), (2, 3), (2, 4), (2, 5), (2, 6)\}) = \frac{2}{6}$

このように μ' は f の確率法則といふ。

1. 1, ..., 10 の番号札が 1 枚ずつはいる箱が 1 枚ある
 ことができる。確率空間 $(X, \mathcal{B}, \mu) = (\{1, \dots, 10\}, \mathcal{P}(X), P)$
 に対し $P(A) = \sum_{i \in A} \frac{1}{10}$ とする。

すなわち、1, 2 は赤札、3, 4, 5 は青札、6, 7, 8 は白札と可
 $Y = \{\text{赤}, \text{青}, \text{白}\}$ とし、 $f(i)$ は札の色と見られる。
 $f(1) = f(2) = \text{赤}$, $f(3) = f(4) = f(5) = \text{青}$, $f(6) = \dots = f(10) = \text{白}$ 。
 Y 上において、 f の確率法則 P_f を構成せよ。

2. X は非可算集合とし、 $\mu = \mathcal{P}(X)$ ($= \mathcal{P}(X)$) とする。
 可測関数 $P: \mathcal{A} \rightarrow [0, 1]$ を

$$P(A) = 0 \quad \text{if } A \text{ は有限可算集合}$$

$$P(A) = 1 \quad \text{if } A^c \text{ は有限可算集合}$$

とす。 P は (X, \mathcal{A}) 上の確率測度となることを示せ

3 原点 O から出発して数直線上をランダムに歩くとする。
 歩いた距離 X が 1 以下ならば P は 1 とし、
 歩いた距離 X が 1 より大きいならば 2 を X の方向
 に歩くとする。この試行を n 回繰り返すと、
 点 P の座標が n である確率は $P_n(X)$ とする。

(i) $P_1(-1)$ の値を求めよ。

(ii) $P_2(5)$ の値を求めよ。

(iii) $P_8(50)$ と $P_8(-127)$ の値は、 2^{-5} より大きいか。

別冊付録

$$1. \quad \mathcal{E}(\mathbb{R}^2) = \left\{ (a_1, b_1] \times (a_2, b_2] ; \right. \\ \left. -\infty \leq a_i \leq b_i \leq +\infty, \quad i=1,2 \right\}$$

と置く。

(a) σ -代数 \mathcal{E} とす：

- $\emptyset \in \mathcal{E}(\mathbb{R}^2)$
- $A \in \mathcal{E}(\mathbb{R}^2), B \in \mathcal{E}(\mathbb{R}^2)$ ならば $A \cap B \in \mathcal{E}(\mathbb{R}^2)$
- $A \in \mathcal{E}(\mathbb{R}^2)$ ならば,

$$\text{ある } n \geq 1 \text{ と } A_1, \dots, A_n \in \mathcal{E}(\mathbb{R}^2) \text{ ならば, } A^c = \bigcap_{j=1}^n A_j^c$$

$$(b) \quad \mathcal{A} = \left\{ A = \bigcup_{i=1}^m A_i ; \exists A_1, \dots, A_m \in \mathcal{E}(\mathbb{R}^2) \right\} \text{ と置く。}$$

σ -代数 \mathcal{A} とす：

- $\emptyset \in \mathcal{A}$
- $A \in \mathcal{A}$ ならば $A^c \in \mathcal{A}$
- $A, B \in \mathcal{A}$ ならば $A \cap B \in \mathcal{A}$

注 $B = \bigcup_{j=1}^n B_j$ とは, $[B = \bigcup_{j=1}^n B_j$ かつ $B_i \cap B_j = \emptyset$ if $i \neq j$]

としよう。

(b) の証明には 次の表現を用いる：

$$A = \bigcup_{i=1}^{m_1} A_i, \quad B = \bigcup_{i=1}^{m_2} B_i \quad \text{のとき,}$$

$$A \cap B = \bigcup_{i_1=1}^{m_1} \bigcup_{i_2=1}^{m_2} (A_{i_1} \cap B_{i_2})$$

2° 集合 X と σ の σ -加法族 \mathcal{A}_X の組 (X, \mathcal{A}_X) は可測空間とす。

$(X, \mathcal{A}_X), (Y, \mathcal{A}_Y)$ は 2 つの可測空間とし,

$\varphi: X \rightarrow Y$ は写像とす。

(a) $\{\varphi^{-1}(B) ; B \in \mathcal{A}_Y\}$ は X の σ -加法族 τ であることを示せ。

(b) $\{B ; B \subset Y \text{ かつ } \varphi^{-1}(B) \in \mathcal{A}_X\}$ は Y の σ -加法族 τ であることを示せ。

3° $A \subset X$, 1_A は A の示し関数とす。つまり

$$1_A(x) = 1 \quad \text{if } x \in A, \quad 1_A(x) = 0 \quad \text{if } x \notin A.$$

を示せ:

(a) $A_1, A_2, \dots, A_n \subset X$, $A = \bigcap_{i=1}^n A_i$ ならば

$$1_A = \prod_{i=1}^n 1_{A_i} = \min(1_{A_1}, 1_{A_2}, \dots, 1_{A_n})$$

(b) $A_1, A_2, \dots, A_n \subset X$, $A = \bigcup_{i=1}^n A_i$ ならば

$$1_A = 1 - \prod_{i=1}^n (1 - 1_{A_i}) = \max(1_{A_1}, 1_{A_2}, \dots, 1_{A_n}).$$

問題 3 <

4 $x \in$ 数列 $x = (x_n; n=0, 1, 2, \dots)$ とし,

$$l^\infty = \{x; x_n \in \mathbb{R} \text{ かつ } \|x\|_\infty = \sup_n |x_n| < \infty\}$$

とす。写像 $T: l^\infty \rightarrow l^\infty$ を,

$$\begin{cases} (Tx)_0 = x_0 \\ (Tx)_n = x_n - x_{n-1} \text{ for } n \geq 1 \end{cases}$$

により定義する。

(1) $e = (1, 1, \dots, 1, \dots)$ とす。 $Tx = e$ とする $x \in l^\infty$ は存在し得るかを示す。

(2) $F \equiv Tl^\infty = \{Tx \in l^\infty; x \in l^\infty\}$ とす。

任意の線形写像 $f: l^\infty \rightarrow \mathbb{R}$ が存在するとは仮定する (Hahn-Banach の定理により証明する):

- $x \in F$ に対し $f(x) = 0$
- $f(e) = 1$
- $\sup \{|f(x)|; \|x\|_\infty \leq 1\} < \infty$

を示す。

任意の n に対し $x_n \geq 0$ となるような $x = (x_n; n=0, 1, \dots)$ に対し $f(x) \geq 0$ となる。

(3) 写像 $S: l^\infty \rightarrow l^\infty$ を, $(Sx)_n = x_{n+1}, n=0, 1, \dots$ と定義する。 $x \in l^\infty$ に対し $f(x) = f(Sx)$ となることを示す。

5 (X, \mathcal{B}, μ) を測度空間とし, $f_0, f_1, f_2, \dots \in \mathcal{L}^1(X, \mathcal{B}, \mu)$ かつ \mathbb{R}^d の可測関数で, 次の条件を満たすものとする:

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int_X |f_n - f_0| d\mu = 0$$

これを示せ:

(1) $\forall \epsilon > 0$ に対し \mathbb{R}^d の有界閉集合 (有界閉集合) $K \subset \mathbb{R}^d$ があって

$$\begin{cases} \mu(\{x; f_0(x) \notin K\}) \leq \epsilon \\ \mu(\{x; f_n(x) \notin K\}) \leq \epsilon, \quad n=1, 2, \dots \end{cases}$$

(2) $g: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}^m$, 連続, に対して

$$\mu(\{x; |g(f_n(x)) - g(f_0(x))| \geq \epsilon\}) \rightarrow 0 \text{ as } n \rightarrow \infty$$

を示す

6 $(\mathbb{R}, \mathcal{B}, \mu)$ を測度空間とする。 $I \subset \mathbb{R}$ の閉区間とする。関数 $F: I \rightarrow \mathbb{R}$ が増加関数とは,

$$x < y \Rightarrow F(x) \leq F(y)$$

が成り立つことを示す。

$$\lim_{\gamma \uparrow x} F(\gamma) = F(x-0), \quad \lim_{\gamma \downarrow x} F(\gamma) = F(x+0)$$

と示す。

$$D_F = \{x; F(x-0) \neq F(x+0)\}$$

と示す。

与えられた非負値測度 μ に対し, 次の (*) を満たす増加関数 F を μ の分布関数とよぶ。(1) の μ に対し (分布関数は一意である)

(*) $[x, y] \subset I$ かつ $x, y \notin D_F$ なる任意の $x, y \in I$ に対し

$$F(y) - F(x) = \mu([x, y]).$$

(6977"キ)

与えられた I に対し, 分布関数が次で与えられる
 ような測度 μ を, 以下の各場合にもとめよ。

(1) $I = \mathbb{R}$

(a) $F(x) = x$

(b) $F(x) = [x]$

(c) $F(x) = \frac{1}{\pi} \arctan x$

(2) $I = (-1, +1)$

(a) $F(x) = \tan \frac{\pi x}{2}$

(b) $F(x) = (\operatorname{sign} x) |x|^{\frac{1}{2}}$

(c) $F(x) = \frac{1}{\pi} \arcsin x$

(3) $I = (0, +\infty)$

(a) $F(x) = \log x$

(b) $F(x) = - \left[\frac{1}{x} \right]$

(c) $F(x) = (x-1)^+$

記法: $[a] = \sup \{ n; n \in \mathbb{Z}, n \leq a \}$

$$a^+ = \sup \{ 0, a \}$$

$$\operatorname{sign} a = +1 \quad \text{if } a > 0$$

$$= 0 \quad \text{if } a = 0$$

$$= -1 \quad \text{if } a < 0$$

7 $f: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ は、 $\forall x, y \in \mathbb{R}$ に対し

$$f(x) + f(y) = f(x+y)$$

とみたし、かつ、1点 $a \in \mathbb{R}$ で "連続" である

ことがわかっている。このとき f は

$$f(x) = f(a)x$$

であることを見せよ。

8 $X = \mathbb{R}$ 上の非負可測関数 f に対し、各 $n \in \mathbb{N}$ に対し

$$A_{n,j} = \left\{ x \in X ; \frac{j-1}{2^n} \leq f(x) \leq \frac{j}{2^n} \right\}, \quad j=1, 2, \dots, n2^n$$

$$B_n = \left\{ x \in X ; f(x) \geq n \right\}$$

とおき、単関数

$$f_n(x) = \sum_{j=1}^{n2^n} \mathbb{1}_{A_{n,j}}(x) \cdot \frac{j-1}{2^n} + n \mathbb{1}_{B_n}(x)$$

を構成する。

(a) $f(x) = x^2$ に対し、 $f_2(x)$ を図示せよ。

(b) $f(x) = |\sin x|$ に対し、 $f_3(x)$ を図示せよ。

実解析

2の1

<積分>

0° 可測空間 (X, \mathcal{A}) 上の非負実数値可測関数 f に対して、
単関数 $f_n \in \mathcal{F}$ のようにしてとると、

$$0 \leq f_1 \leq f_2 \leq \dots, \quad \lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x) = f(x)$$

である。

1° 以下見かき可測単関数 φ とかく: $\varphi(x) = \sum_{i=1}^m a_i 1_{A_i}(x)$,
 $A_i \in \mathcal{A}, a_i \geq 0$.

与えられた単関数 $\varphi(x) = \sum_{i=1}^m a_i 1_{A_i}(x)$ の積分を

$$\int_X \varphi(x) \mu(dx) = \sum_{i=1}^m a_i \mu(A_i)$$

により定義する。

2° X 上の非負実数値可測関数 f に対して、非負単関数の
増大列 $(\varphi_n; n \in \mathbb{N})$ で $\lim_{n \rightarrow \infty} \varphi_n(x) = f(x)$ なるものか、0°
によりとれる。 f の積分を

$$\int_X f(x) \mu(dx) = \lim_{n \rightarrow \infty} \int_X \varphi_n(x) \mu(dx)$$

により定義する。左辺の値は増大列 (φ_n) のとり方によらない
ことかかっている。

3° X 上の実数値可測関数 f に対して、 $f^+, f^- \in \mathcal{F}$

$$f^+(x) = f(x) \vee 0, \quad f^-(x) = -(f(x) \wedge 0)$$

とかく。 f^+, f^- は非負実数値可測関数で

$$f(x) = f^+(x) - f^-(x), \quad |f(x)| = f^+(x) + f^-(x)$$

である。2°により $\int_X f^+(x) \mu(dx), \int_X f^-(x) \mu(dx)$ がい
定義できるので、これを用いて f の積分を

$$\int_X f(x) \mu(dx) = \int_X f^+(x) \mu(dx) - \int_X f^-(x) \mu(dx)$$

と定義する。

$E \subset X$ 上の関数 f に対して, その積分を

$$\int_E f(x) \mu(dx) = \int_X 1_E(x) f(x) \mu(dx)$$

によって定義する。

$\int_X f^+(x) \mu(dx) + \int_X f^-(x) \mu(dx) < +\infty$ なるとき,
 $\langle f \text{ は } X \text{ 上可積分 (integrable)} \rangle$ としよう。

1. 単関数 φ が 2つの表現

$$\varphi = \sum_{i=1}^n a_i 1_{A_i} = \sum_{j=1}^m b_j 1_{B_j}$$

($a_i, b_j \geq 0, A_i, B_j \in \mathcal{A}, (A_i), (B_j)$ は disjoint であること) をもてば,

$$\sum_{i=1}^n a_i \mu(A_i) = \sum_{j=1}^m b_j \mu(B_j)$$

であることを見せよ。

2. 非負の単関数の列 $(\varphi_n; n \in \mathbb{N})$ と $(\psi_n; n \in \mathbb{N})$ が,

1) φ_n は n について単調増大かつ $\lim_{n \rightarrow \infty} \varphi_n(x) = \varphi(x)$ なるならば,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int_X \varphi_n(x) \mu(dx) = \int_X \varphi(x) \mu(dx)$$

2) ψ_n は n について単調増大かつ $\lim_{n \rightarrow \infty} \psi_n(x) = \psi(x)$ なるならば,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int_X \psi_n(x) \mu(dx) = \int_X \psi(x) \mu(dx)$$

であることを見せよ。

3. (X, \mathcal{A}, μ) を測度空間, (X', \mathcal{A}') を可測空間,

$f \in \mathcal{M}(X, \mathcal{A}, \mu; X', \mathcal{A}')$ 間の可測変換関数とする:

$$f: X \rightarrow X'$$

$$A' \in \mathcal{A}' \text{ に対して } \mu(A') = \mu(f^{-1}(A'))$$

とあわせて, μ は (X', \mathcal{A}') 上の測度となることを見せよ。

2.2

<積測度>

2.2.1 測度空間 $(X, \mathcal{A}_X, \mu), (Y, \mathcal{A}_Y, \nu)$ をとる。

$Z = X \times Y$ とおく。 $A \in \mathcal{A}_X, B \in \mathcal{A}_Y$ に対し、

$A \times B (C \subset Z)$ を可測な積集合という。可測な積集合の有限個の和集合の全体を \mathcal{A}_Z^0 とおく。

Prop 1. \mathcal{A}_Z^0 は Z の有限加法族である。

\mathcal{A}_Z^0 から生成された σ -加法族を \mathcal{A}_Z とおく。 \mathcal{A}_Z の元を Z の可測集合という。 (Z, \mathcal{A}_Z) の上に測度を定義したい。

Thm 2. (Z, \mathcal{A}_Z) の上に次のような測度 π が存在する:

(*) $A \in \mathcal{A}_X, B \in \mathcal{A}_Y$ に対し $\pi(A \times B) = \mu(A) \nu(B)$.

もし X, Y とも σ -有限ならば"上のような π はただ一つ"である。

(注) σ -加法族 \mathcal{A}_Z を $\mathcal{A}_X \times \mathcal{A}_Y$ と記すことができる。

測度 π を $\mu \times \nu$ と記すことができる。

° $E \subset Z = X \times Y$ とし、 $x \in X, y \in Y$ は変数を表す。

E の x -断面 (x -section) E_x, E の y -断面 (y -section) E_y を次のように定める:

$$E_x = \{y \in Y; (x, y) \in E\}, E_y = \{x \in X; (x, y) \in E\}$$

f は Z から $\mathbb{R} \cup \{\pm\infty\}$ への関数とし、 $x \in X, y \in Y$ は変数を表す。

f の x -断面 (x -section) f_x, f の y -断面 (y -section) f_y を次のように定める:

$$f_x(y) = f(x, y), y \in Y; f_y(x) = f(x, y), x \in X.$$

Prop 3. (a) もし $E \in \mathcal{A}_Z$ ならば、 E の各 x -断面、 y -断面は

$$E_x \in \mathcal{A}_Y, E_y \in \mathcal{A}_X \text{ である。}$$

(b) もし f が Z から $\mathbb{R} \cup \{\pm\infty\}$ への可測関数ならば、

f_x は \mathcal{A}_Y -可測、 f_y は \mathcal{A}_X -可測である。

±3k,

Thm 4. $(X, \mathcal{A}_X, \mu), (Y, \mathcal{A}_Y, \nu)$ を有限測度空間とし
 とする。 $E \in \mathcal{A}_2$ に対し,

$$\varphi(x) = \nu(E_x), \quad \psi(y) = \mu(E^y)$$

とす。このとき, φ, ψ は各々 \mathcal{A}_X -可測, \mathcal{A}_Y -可測であり,

$$\int_X \varphi(x) d\mu(x) = \nu(E) = \int_Y \psi(y) d\nu(y)$$

1. $A \subset X, B \subset Y$ とする。次を証明せよ:

(a) $\mu(A = \emptyset \text{ かつ } \nu(B = \emptyset) \text{ ならば } A \times B = \emptyset$

(b) $\mu(A \times B = \emptyset \text{ ならば } (A = \emptyset \text{ かつ } B = \emptyset)$

2. $A_1, A_2 \subset X, B_1, B_2 \subset Y$ とする。次を証明せよ:

(a) $A_1 \times B_1 = A_2 \times B_2 \text{ ならば } (A_1 = A_2 \text{ かつ } B_1 = B_2)$

(b) $(A_1 \times B_1) \cup (A_2 \times B_2)$

$$= [(A_1 \setminus A_2) \times B_1] \cup [(A_1 \cap A_2) \times (B_1 \cup B_2)] \cup [(A_2 \setminus A_1) \times B_2]$$

かつ右辺の [] は互いに disjoint である。

(c) $(A_1 \times B_1) \setminus (A_2 \times B_2) = [(A_1 \cap A_2) \times (B_1 \setminus B_2)] \cup [(A_1 \setminus A_2) \times B_1]$

(d) $(A_1 \times B_1) \cap (A_2 \times B_2) = (A_1 \cap A_2) \times (B_1 \cap B_2)$

3. f, g は各々 X 上, Y 上の実数値関数で, f は \mathcal{A}_X -可測,

g は \mathcal{A}_Y -可測) とする。 $Z = X \times Y$ 上の関数 h を

$$h(x, y) = f(x)g(y), \quad (x, y) \in Z$$

と定める。 h が $\mathcal{A}_X \times \mathcal{A}_Y$ -可測であることを示せ。

実解析

2の3

< Fubini の定理 >

1° $(X, \mathcal{A}_X, \mu), (Y, \mathcal{A}_Y, \nu)$ を \mathbb{R} の σ -有限な測度空間とす。 $f \in L^1(\mu \times \nu)$ の実数値関数で $\mathcal{A}_X \times \mathcal{A}_Y$ 可測なものとする。 \mathbb{R} の σ -有限な積測度 $\pi = \mu \times \nu$ によって

重積分
$$\int_{X \times Y} f(x, y) (\mu \times \nu) (dx dy)$$

を定義できる。問題は

- この重積分を $\int_Y (\int_X f(x, y) \mu(dx)) \nu(dy)$ と直せるか？

$$\int_Y \left(\int_X f(x, y) \mu(dx) \right) \nu(dy)$$

に直せるか？

- $\int_X (\int_Y f(x, y) \nu(dy)) \mu(dx)$ と積分の順序交換

$$\int_Y \left(\int_X f(x, y) \mu(dx) \right) \nu(dy) = \int_X \left(\int_Y f(x, y) \nu(dy) \right) \mu(dx)$$

が成り立つか？

である。

Th 1 (Fubini の定理 I) f を非負 $\mathcal{A}_X \times \mathcal{A}_Y$ 可測関数とする

(1) $y \in Y$ を固定すると $f(x, y)$ は x の関数として \mathcal{A}_X -可測である。

(2) $y \mapsto \int_X f(x, y) \mu(dx)$ は \mathcal{A}_Y -可測関数である。

(3)
$$\int_{X \times Y} f(x, y) (\mu \times \nu) (dx dy) = \int_Y \left(\int_X f(x, y) \mu(dx) \right) \nu(dy)$$

Th 2 (Fubini の定理 II) 実数値関数 f は $\mu \times \nu$ 可積分 と可る。

(1) a.e. $y \in Y$ に對し

$$g(y) = \int_X f(x, y) \mu(dx)$$

は有限で"あり, $g(y)$ は ν -可測"である。

(2) $g(y)$ は ν -可積分で",

$$\int_{X \times Y} f(x, y) (\mu \times \nu)(dx dy) = \int_Y \left(\int_X f(x, y) \mu(dx) \right) \nu(dy)$$

○ 無限直積測度

(X_i, \mathcal{A}_i) , $i=1, 2, \dots$ は可測空間, $X = \prod_{i=1}^{\infty} X_i$ とおく。

X 上の有限加法族 \mathcal{A} を次で定義可る:

$$\mathcal{A} = \left\{ A = E \times \prod_{i=n+1}^{\infty} X_i; E \in \mathcal{A}_1 \times \dots \times \mathcal{A}_n, 1 \leq n < \infty \right\}$$

μ_i は (X_i, \mathcal{A}_i) 上の $\mu_i(X_i) = 1$ である可測度とする。

(X, \mathcal{A}) 上の有限加法的測度 m を次で定義可る:

$$A = E \times \prod_{i=n+1}^{\infty} X_i, E \in \mathcal{A}_1 \times \dots \times \mathcal{A}_n, \text{ に対し}$$

$$m(A) = (\mu_1 \times \dots \times \mu_n)(E)$$

すなわち

○ m は \mathcal{A} 上完全加法的である

ことを証明可る (証明は長々としてあるが)。

したがって, E. Hopf の拡張定理より, m は $\sigma(\mathcal{A})$ 上の測度に拡張可る。

$\sigma(\mathcal{A})$ は $\prod_{i=1}^{\infty} \mathcal{A}_i$, m の拡張を $\prod_{i=1}^{\infty} \mu_i$ とおき, 各 μ_i を無限直積 σ -加法族, 無限直積測度とよぶ。

3° f は (X, \mathcal{A}, μ) 上の非負可測関数と可る。

$$\int f d\mu = 0 \quad \text{ならば} \quad f(x) = 0 \quad \text{a.e. in } X$$

と可ることは示せ。

4° $X = \mathbb{N}$, $\mathcal{A} = \mathcal{P}(\mathbb{N})$ ($\equiv \mathbb{N}$ の部分集合の全体),

μ は \mathbb{N} 上の counting measure

i.e. $A \subset \mathbb{N}$ に対し

$$\mu(A) = \#\{i; i \in A\}.$$

と可る。

$f: \mathbb{N} \rightarrow [0, +\infty)$ かつ f は可測関数と可る。

この f は $(\mathbb{N}, \mathcal{A}) \rightarrow (\mathbb{R}, \mathcal{B}(\mathbb{R}))$ の可測関数と可る,

$$\int f d\mu = \sum_{n=1}^{\infty} f(n)$$

と可ることは示せ。

実解析

2の4

<収束定理>

ルバ-グ積分のハ-リ-は、極限操作の自由性に及ぶ。

次の命題が基本的である。

命題1 $(f_n; n \in \mathbb{N})$ を X 上の非負可測関数の増大列とする。このとき、 $x \mapsto \lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x)$ は可測関数であり、

$$\int_X \lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x) \mu(dx) = \lim_{n \rightarrow \infty} \int_X f_n(x) \mu(dx).$$

これをよからず次を示せる。

命題2 f は X 上可積分とする。

(1) $E_n \in \mathcal{A}$, $E_n \cap E_m = \emptyset$ ($n \neq m$) とする。

$E = \bigcup_{n=1}^{\infty} E_n$ とおく。このとき、

$$\int_E f(x) \mu(dx) = \sum_{n=1}^{\infty} \int_{E_n} f(x) \mu(dx).$$

(2) $E_n \in \mathcal{A}$, $E_1 \subset E_2 \subset \dots \subset E_n \subset \dots$ とする。

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int_{E_n} f(x) \mu(dx) = \int_E f(x) \mu(dx).$$

⊙ $f = f^+ - f^-$ とおく。 $f^+ = \max(f, 0)$, $f^- = \max(0, -f)$ が可積分だから、 f^+ , f^- も可積分である。したがって $f \geq 0$ と仮定してよい。 $f_n = 1_{E_n} \cdot f$ として命題1を適用せよ。

定理3 (Fatouの補題)

$(f_n; n \in \mathbb{N})$ を非負可測関数列とする。

$$\int_X \liminf_{n \rightarrow \infty} f_n(x) \mu(dx) \leq \liminf_{n \rightarrow \infty} \int_X f_n(x) \mu(dx).$$

定理 4 (ルベグの収束定理)

$(f_n; n \in \mathbb{N})$ は X 上の可測関数列である。ある非負の可積分関数 g があって

$$\forall n \in \mathbb{N} \quad \forall x \in X \quad (|f_n(x)| \leq g(x))$$

とあって $\lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x)$ がほとんど必ず存在する。このとき

$$\int_X \lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x) \mu(dx) = \lim_{n \rightarrow \infty} \int_X f_n(x) \mu(dx)$$

系 (有界収束定理)

$\mu(X) < +\infty$ とする。ある $M > 0$ があって

$$\forall n (|f_n(x)| \leq M) \quad \text{ならば,}$$

$$\int_X \lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x) \mu(dx) = \lim_{n \rightarrow \infty} \int_X f_n(x) \mu(dx)$$

1° $t > 0, \lambda \in \mathbb{R}$ に対し

$$\int_{-\infty}^{+\infty} e^{i\lambda x - tx^2} dx = \sqrt{\frac{\pi}{t}} e^{-\frac{\lambda^2}{4t}}$$

とあることを示す。

hint. $t > 0$ に対し $\int_0^{\infty} e^{-tx^2} x^{2n} dx = \frac{1 \cdot 3 \cdot \dots \cdot (2n-1)}{2^{n+1}} \sqrt{\pi t}^{-\frac{1}{2}}$

2° f は \mathbb{R}^d 上で可積分と可する。 $\zeta \in \mathbb{R}^d$ に対し

$$\hat{f}(\zeta) = \int_{\mathbb{R}^d} e^{-i\langle x, \zeta \rangle} f(x) dx, \quad \langle x, \zeta \rangle = x_1 \zeta_1 + \dots + x_d \zeta_d$$

と置く。 $\zeta \mapsto \hat{f}(\zeta)$ は \mathbb{R}^d 上の連続関数であることを示す。